



近代の山鹿の  
偉人たち  
シリーズ

012

山鹿灯籠製作技術を集大成、広く公開（一八八〇～一九七二）

# 松本清記

まつ

もと

せい

き

和紙と糊<sup>のり</sup>だけで製作する山鹿灯籠の歴史は室町時代にさかのぼる。灯籠製作者を灯籠師と呼び、その技術は代々改良が施され、秘伝とされてきた。その技術を集約し、一般に広く公開した灯籠製作の第一人者が松本清記である。

家業の時計屋を営みながら、灯籠作りの情熱を持ち続け、数々の大作・名作を作り、後継者の育成、製作技術の改良・保存に多大の貢献をした。

温厚な人柄で山鹿市民から親しまれ、熊本県近代文化功労者顕彰、熊本日日新聞社会賞を受賞。昭和三十九年には、山鹿市名誉市民の称号が贈られた。



昭和 30 年頃の上がり灯籠

献上するとか、宝暦四年（一七五四）には、肥後藩主細川越中守重賢に献上するなどの記録も残っています。

『山鹿灯籠見物記』は、江戸時代、文化・文政年間（一八〇四〜一八三〇）の灯籠まつりの様子を今に伝える貴重なものです。これは、下益城郡の尾窪村（今の城南町）から来た五人の灯籠祭見物の記録で、奉納した灯籠の名称と商家の屋号が克明に書かれています。

大宮神社に奉納した灯籠の台数は九十五とありますから、この頃の山鹿灯籠まつりはかなりにぎわっていたものと思われまます。

灯籠の歴史の中では、文化・文政の頃が最盛期であったようで、山鹿湯町の多くの住民が灯籠を作り、祭り行事に携わっていました。

江戸時代の末期になると、世の中はあわただしく、各地で戦争が起き、やがて明治時代の幕が開きます。幕末の頃、山鹿灯籠は衰退していたようです。

明治時代になると、山鹿灯籠まつりも復活し、木村仙太郎（松本清記の義父）など優れた灯籠師が現れ、灯籠製作技術はさらに進歩します。このころの大宮神社への奉納台数は、八十台ぐらいあり、明治末期でも六十台ぐらいの奉納があったようです。

松本清記は、養父たちの仕事を手伝いながら灯籠製作技術を習得し、めきめきと腕をあげ、次第に頭角を現し始めました。

## 絵を描くことが好きだった少年時代

清記は、松本順平、ツギを両親に、明治十三年五月五日、旧山本郡山本村字内村（現在の熊本市植木町）に生まれました。

## はじめに

山鹿灯籠の起こりは室町時代といわれますが、今から約五百年前の戦国時代には、全国で戦争が続き、山鹿灯籠まつりは途絶えていました。

しかし、後陽成天皇の文禄年間（一五九二〜一五九六）になると戦争も少なくなり、山鹿灯籠まつりも復活します。

さらに江戸時代になると、紙細工の技術は一段と向上して、山鹿灯籠として世間に知られるようになりました。慶長年間（一五九六〜一六一五）には、山鹿灯籠を徳川二代将軍秀忠に

## ちょっとコラム①

### ●山鹿灯籠と灯籠師

山鹿灯籠の起り方は、室町時代の金灯籠からはじまったといわれています。その後、改良が進み、神殿造り、城造り、座敷造り、鳥籠、矢壺などの灯籠が作られるようになりました。

その作り方には一貫した鉄則があります。

- 一 木や金具は一切使わず、和紙と少量の糊だけで作られています。
- 二 柱や障子の棧などは空洞になっています。
- 三 独自の寸法で作られていて、ただ単なるミニチュアではありません。

山鹿灯籠製作者を灯籠師と呼びます。灯籠師は高等な技術と熟練を要し、一人前になるには、十数年の期間が必要といわれています。



座敷造り



神殿造り

手のかからない、素直なよい子として育ち、四歳から五歳ころは折り紙が好きで、祖母を相手に日当たりの良い縁側で一日中、いろいろな形の折り紙を折って遊んでいました。また、祖母の膝の上で画本を読むのも大好きでした。

山本小学校に入学すると、画本を買ってもらおうとそれを読むだけでなく、別の紙に写し取り、墨で色をつけて楽しんでいました。十歳ころには、張物に興味を覚えました。ある日のこと、ふすま屋が松本家の仕事に来たとき、清記は一日中座り込んで、その様子をにらむように見つめていました。都合でふすま屋が二、三日分の仕事を残し休んだあとと来てみると、きちんと仕上がっていたそうです。松本少年は、見よう見まねで本職顔負けの仕事を行い、大人たちをびつくりさせました。

十四歳になると、絵画の修業に打ち込みました。山鹿町松坂の観松堂浦田雪翁に師事し、自宅から片道約八キロの道のりを歩いて通いました。

たまには山鹿町の親類（後の養父）木村仙太郎宅に泊まること

もありました。仙太郎は、時計屋を営んでいましたが、山鹿灯籠製作ではすでに名人の域に達していました。すさまじいばかりの気骨で無心に灯籠製作に打ち込むおじの姿を見て、灯籠製作にぐいぐい惹かれていきました。

「お前は器用だから」と、山鹿灯籠作りの手伝いをさせられることもあり、外の弟子たちの数倍も役に立っては、おじを喜ばせました。

このころの経験がのちに清記を灯籠師へと駆り立てるきっかけとなったのに違いありません。

十六歳のころには、近くの田底村に表具をよくする人がいて、清記は弟子入りし、農耕のかたわら、表具の修業を三年ほど行いました。しかし、表具の合間に、ちょっと筆をにぎると、自分を忘れて無心に絵を描いていたそうです。

そのあと、さらに絵画の技術を磨くために、川尻付近に住む南画の鬼度先生、それから熊本新町の雲林院蘇山先生に師事して絵画の勉強に励みました。

## 灯籠製作の名人木村仙太郎の婿養子になる

明治三十三年、二十歳になった清記は、山鹿の親類の木村仙太郎の婿養子として迎えられました。当時、仙太郎は五十五歳でした。

清記は、まず、家業の担い手として時計修理を覚えることから始めました。しかし、仙太郎は、清記に自ら手を取って教えるようなことはしません。これは、灯籠製作にもいえることで、父のする仕事を観察して、覚えるしか方法はありませんでした。

清記は、創意工夫を重ね、その年はじめて、独力で金灯籠を数個作り上げました。そのときの感激は、しっかりと脳裏に刻まれ、清記にとつて決して忘れられない出来事になりました。

明治三十年代中頃の奉納灯籠の台数は約六十で、その大半が金灯籠でした。座敷造りや神殿造りは少なく、そのほとんどを仙太郎たちが製作していました。

清記は、熱心に灯籠製作を手伝い、別に父から教わることもな



清記が描いたふすま絵



息子と一緒に記念撮影（30代の清記）

く、製作の技法や約束事などを習得していきました。そして、明治三十五年には、座敷造りを、翌年の明治三十六年に神殿造りを、自らの力で見事に仕上げました。

## 企業からの製作が増える

明治三十七年には、日露戦争がおこり、山鹿の町は灯籠まつりどころではありません。この年、養父であり、良き師でもあった仙太郎は、病気のため他界しました。清記は、灯籠作りの技においても時計職人の職においても、養父の遺産を守り、家庭を支えねばなりません。

日露戦争後、やがて灯籠まつりは復活します。坂井・木村・高田・中原等の一流中堅灯籠製作者と並んで、新進気鋭の清記は

頭角を現しはじめ、その作風は、重厚、繊細として次第に名声を高めていきました。そして、明治四十年には長男武士が、明治四十二年には、二男孝輔が生まれました。

明治四十二年には、清記にとって生涯の大作といわれる「熊本城全景」の灯笼を製作しました。これは清正公三百年記念祭に出品したものです。明治三十四年頃に灯笼師の仲間入りをし、わずか八年にしてこの偉業を達成しました。清記の天才ぶりをうかがわせた出来事でした。

第一次世界大戦の前後、経済界の好況は、山鹿灯笼製作にも強い影響をもたらしました。久留米のつちや足袋株式会社から、会社の全景を作って欲しいとの依頼があり、清記は久留米に出張して灯笼を製作しました。灯笼まつりのための奉納灯笼作りとは別に、企業から灯笼製作の依頼があるようになりました。

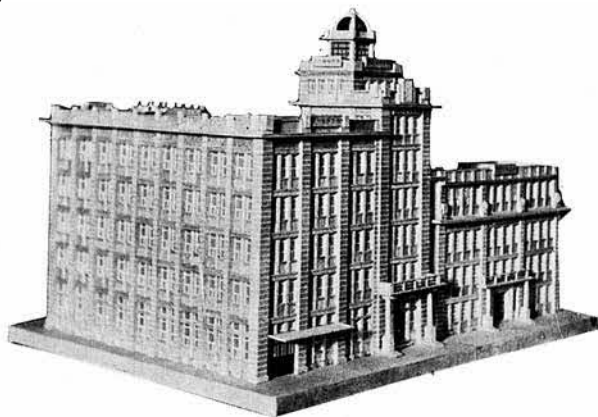
大正十年、清記の妻マモは四児を残して他界しました。清記は心の痛手を受け、スランプに陥り、大正末期は目を見張る灯笼は乏しくなっていました。

しかし、昭和のはじめころに新しい夫人トメを迎え、心機一転して製作意欲が蘇ってきました。大阪毎日新聞本社全景、東京日日新聞本社全景の製作という灯笼の大作の依頼があり、長男武士と約四カ月間出張して製作にあたりました。

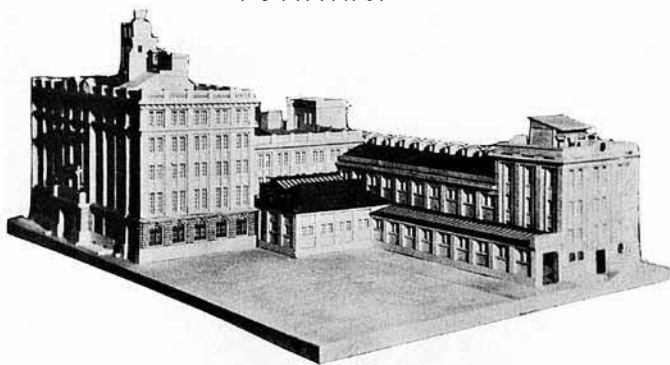
## 秘伝の技術を広く伝える

清記は灯笼製作の伝統を守るために、自ら大作・名作を作り続ける傍ら、後継者の確保と育成にも力を入れました。

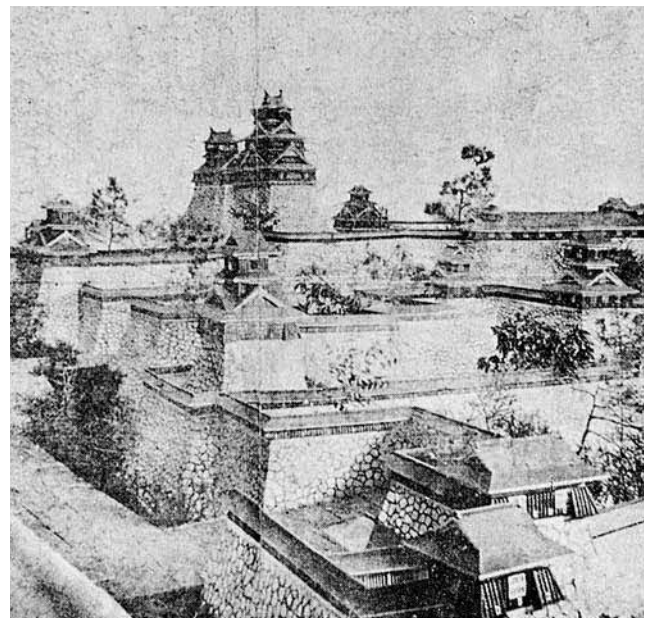
もともと、山鹿灯笼は、商家のお家芸として発展し、その家ごとに代々伝わる秘法は門外不出で、容易には公開されませんでした。「矢つぼ」は江上家、「鳥かご」は荒木家と言うふうに一定していて、とすればこれらの技法は絶滅の恐れさえありました。



東京日日新聞社



大阪毎日新聞社



熊本城の全景（明治42年）

清記はそれらの技法を集大成し、懇切丁寧<sup>こんせつていねい</sup>に弟子<sup>でし</sup>たちに余すことなく伝えました。清記から直接手ほどきを受けた弟子たちは十数名おり、その中から優れた灯籠師<sup>とうろうし</sup>たちが育っていきました。

## たった一基の奉納灯籠

支那事変<sup>しなじへん</sup>から第二次世界大戦と戦争の時代が続き、灯籠まつり行事はさまざまな制約を受け、室町時代から続く伝統の灯火<sup>ともしび</sup>もまさに絶えようとしていました。

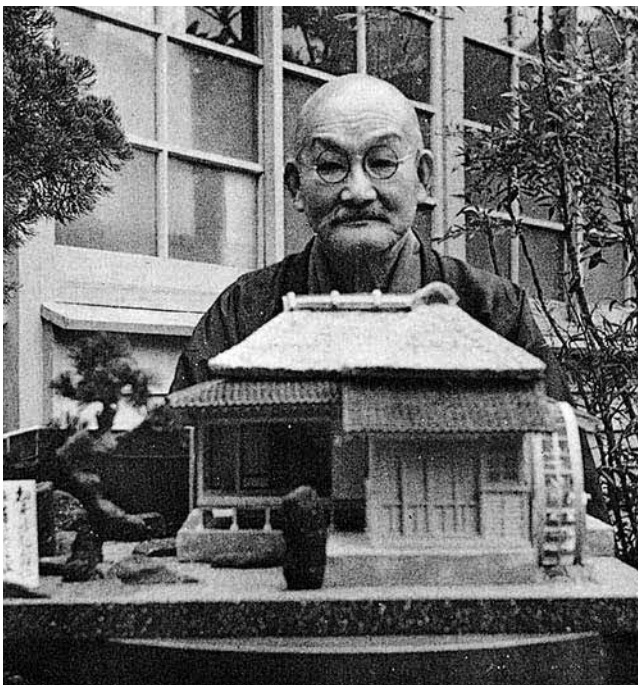
昭和二十年八月、広島、長崎に続けて原子爆弾が投下され、日本はポツダム宣言を受諾<sup>じゅたく</sup>し、第二次世界大戦の幕が下りました。

八月十五日は、お祭りどころではなく、山鹿の人たちは敗戦の悲しみに打ちひしがれていました。しかし、そのような状況下で、六十五歳になる清記が製作した座敷作りただ一基のみの灯籠が、八月十六日の夜、大宮神社に奉納されました。もしかしたら、これが本当に最後の山鹿灯籠まつりになるのではないか、山鹿の人たちは誰しも危機感を募<sup>も</sup>らせました。

ところが、敗戦から数年で灯籠まつりは復活し、清記の教えを受けたたくさんの弟子たちによって山鹿灯籠が製作され、再び山鹿の町に活気が蘇<sup>よみがえ</sup>りました。

昭和二十九年、清記は「水車のある家」という灯籠を作りました。小説家尾崎士郎<sup>おざきしろう</sup>が書いた小説『灯』<sup>とう</sup>にちなむもので、清記の代表作の一つです。

農家の藁葺<sup>わらぶ</sup>きの家で、水車をこしらえ、庭にも趣向<sup>しゆうきゆう</sup>を凝<sup>こ</sup>らしています。藁<sup>わら</sup>は一本一本こよりを作り、何千本かで屋根を葺いていきます。



水車のある家



天皇皇后両陛下の前で灯籠の製作実演  
(昭和33年「熊本県産業館」)



朝湯帰りの清記（昭和34年）

## 晩酌と朝風呂が大好き

清記はお酒が好きで、毎日の晩酌が最大の楽しみでした。焼酎にはよく砂糖を入れて飲んでいました。また、入浴は朝湯が好きで、朝の六時ころ、公衆浴場のさくら湯に通うのが毎日の日課でした。お風呂帰りには、元気に登校する子どもたちと擦れ違いました。六十歳ころから弓道に興味を持つようになり、毎朝大宮神社に行って練習に励み、宇野先生と宮本先生の二人の良き師に付いたおかげで腕をあげ、五段になりました。健康にはよく気を付け、九十二歳という長寿で他界しました。

## ちょっとコラム②

### ●父の思い出（松本梅香さん）

松本清記氏の長女の松本梅香さん（山鹿市大宮通在住）に父親の思い出を語ってもらいました。

- ・実際製作するときは、汗かきだったので、汗が落ちて作品を傷めないように鉢巻をして作っていました。鉢巻をして製作している写真は残念ながらありません。
- ・戦争の時、空襲警報がなると、他は何も持たずに灯笼製作の道具のみを持って避難していました。終戦の時、父が執念で製作したわずか一台の灯笼が大宮神社に奉納されました。
- ・料理も好きで上手でした。11月15日の山鹿まつりのときには、巻き寿司をたくさん作って、お店を訪ねてくる人に振舞っていました。また、盆栽も好きで、たくさんのランやサボテンを育てていました。
- ・丁寧に仕事をしますので、製作には時間がかかりました。締め切りの期限が迫っても決して手を抜くようなことはありませんでした。ちっともあわてないので、「もう、間に合わない」と思ったお弟子さんたちが手伝ってくれて、何とか灯笼まつりに間に合ったときもありました。お弟子さんたちは、祭りが近づくといつもはらはらしていました。
- ・父が怒ったところは見たことがありません。私が小学3・4年生くらいのとき、灯笼の近くで遊んでいて、つまずいて屋根の部分を壊してしまいました。怒られるものと縮こまっていたら、すんなり許してくれました。いつもにこにこしていて非常に温和な方でした。
- ・毎日の晩酌が最大の楽しみでした。焼酎に砂糖を入れ、一合ずつ飲んでいました。毎日夕方になるとよくお酒を買いに酒屋に行かされました。ほかに、朝風呂も大好きでした。

# 年表 History

明治十三年 (二八八〇)	鹿本郡山本村の農家に生まれる
明治二十六年 (二八九三)	山本小学校高等科に進学 農業にも精を出す
明治二十七年 (二八九四)	画道を志し山鹿町松坂の観松堂浦田雪翁に師事し往復四里の道を通う
明治二十九年 (二八九六)	十六才 田底村の表具師に弟子入りして習業
明治三十三年 (二九〇〇)	二十才 山鹿町木村仙太郎の婿養子となり、金灯籠数個を作る
明治四二年 (二九〇九)	熊本城全景の灯籠を作る(清正公三百年記念祭)
大正十年 (二九二二)	四児を残して妻マモ他界、スランプに陥る
昭和二年 (二九二七)	トメと再婚 大阪毎日新聞本社・東京日日新聞本社を灯籠で作る
昭和六年 (二九三二)	熊本県の委嘱を受け熊本城一の天守二の天守を作る
昭和二〇年 (二九四五)	山鹿灯籠祭に座敷灯籠一基を奉納(ただ一基のみ)
昭和二九年 (二九五四)	灯籠「水車のある家」を作る
昭和三〇年 (二九五五)	山鹿市(古閑一夫市長は松本清記を表彰)
昭和三三年 (二九五八)	熊本県教育委員会は松本清記を熊本県近代文化功労者として顕彰状を贈る
昭和三九年 (二九六四)	熊本日日新聞社会賞を受ける
昭和四二年 (二九六七)	熊本県産業館において、九州旅行の昭和天皇皇后両陛下の前で灯籠製作を実演し、座敷灯籠を献上。
昭和四七年 (二九七二)	山鹿市は山鹿市名誉市民の称号を贈る
昭和四二年 (二九六七)	山鹿市長は米寿の記念品を贈る
昭和四七年 (二九七二)	九十二才で死去

## 山鹿灯籠伝説

### ●景行天皇伝説

第十二代景行天皇が九州御巡幸の折り、玉名の方から菊池川をさかのぼって、今の山鹿大橋付近に上陸しようとされました。しかし、付近一帯に白霧が立ち込め天皇たちの行く手をはばみました。

そのとき、山鹿の里人たちは、手にたいまつを持って天皇たちを無事案内したので、天皇はこのほかお喜びになりました。

以来、里人たちは、行在所跡(今の大宮神社の地)に景行天皇を祀り、毎年たいまつを献上したのが、灯籠まつりの起源といわれています。

### ●大亀伝説

米田から千田、田底にかけては、大昔は一面湖で茂賀の浦と呼ばれていました。阿蘇の健甞命(阿蘇神社の主神で、地元では阿蘇大明神の名で親しまれています)がこの茂賀の浦を通って山鹿の花見坂に向かわれようとしたとき、湖から頭が八つある大亀が現われました。命は矢継ぎ早に大亀を退治なさいました。

その大亀の霊を鎮めるために、毎年、たいまつを大宮神社に献灯したのが、灯籠まつりの由来といわれています。

### ●温泉復活由来説

金剛乗寺由来記によれば、文明五年(一四七三)三月に町の宝物である温泉が突然かれてしまいました。そのとき金剛乗寺住職の宥明法印が一心に温泉復活を祈ったところ、同年十二月二十日の夜中にお湯が再びこんこんと湧き出しました。以来、法印は温泉再生の大恩人として崇められました。

文明十七年(一四八五)九月十五日、法印は亡くなり、町人たちは翌年の四月十五日から七月十五日にかけて法印の追善大法要を行いました。

大法要にあたって町人たちは紙細工の名人山口兵衛に依頼し、数百の紙灯籠を作らせ、法印の霊前に供えました。

この行事は毎年七月十五日に行われ、以後五年間続きました。延徳三年(一四九一)に大宮神社の神官が町内の人々と相談し、金剛乗寺の住職に、七月十五日の宥明法印の献灯が済んだ後、翌十六日には町中がにぎわうように、大宮神社に移し献灯したいと申し出た結果、寺側がそれを快く承しました。これが山鹿灯籠のいわれといわれています。

### 参考文献・ご協力頂いた方(敬称略)

- 『山鹿灯籠』(山鹿市)
- 『新補山鹿市史』(山鹿市)
- 『湯トピア山鹿 山鹿温泉観光辞典』(山鹿市)
- 松本梅香(山鹿市)
- 松本賢治(〃)

### 近代の山鹿を築いた人たち 012

## 山鹿灯籠製作技術を集大成、広く公開 松本 清記

平成 22 年 3 月 発行

山鹿市教育委員会 教育部 文化課

〒861-0541 熊本県山鹿市鍋田 2085(博物館内)  
TEL 0968-43-1691

### 編集委員

児玉徳夫(山鹿市文化財協力員)  
井上欣也(文化課)